



2003年(平成15年)
11月号(No. 702)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●http://www.jac.or.jp

e-mail●jac-info@jac.or.jp

目次

100周年を契機に名誉ある役を・1	
100周年ニュース	4
報告	5
図書・富士吉田口登山道の視察／山研・プチ・オートムコンサート	6
支部だより	6
北海道／岐阜／富山	8
海外の山	8
Climbing & Medicine	26・9
東西南北	10
日本山岳会の稀観本『高山深谷』／英国の山3峰／金華山登頂5000回達成／短歌・ある日の山／俳句・上高地・山研／ウェストンと北岳登頂	14
図書紹介	14
『山の仕事、山の暮らし』『もうひとつの快晴の山』『Japanese Expedition Experiences in the Nepal Himalaya』	16
会務報告	16
冬期ローツェ南壁隊	17
山岳遭難事故合同調査へのご協力お願い	18
図書受入報告・新入会員	18
INFORMATION	19
ルーム日誌	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

100周年を契機に名誉ある役を

大森 弘一郎

昨年のクリスマスの日にスイスに居た私は、急に行きたくなつてグリーンデルワルドに行った。ホテルベルビューがあいにくクリスマスで休み。しょうがなしに向かいの小さなホテルに入った。

ホテルの部屋で窓を開けると正面にアイガーが迫っていた。そして、テレビをつけるといきなり横さんの顔が飛び出たのでびっくり……。

アイガー東山稜の登攀が成功したあとの駅で肩車をしている見慣れた写真まで出てきた。ミッテルギ小屋の改築からなので番組で

はあったが、繰り返し放映される番組を見ていて、スイスの人の心に未だ横さんが生きているのに驚いた。

信者でもないのに教会に行つた。外に出ると、アイガーの壁が黒く覆い被さるように聳えていた。

100年ほどの前、当時のアイガーは未知と困難の世界であり、それへの登攀を考えることは正にパイオニアの挑戦であつたろう。このころはライト兄弟の時代である、今の飛行機がそこから発展したことを考えれば、今日の装備と

技術がなかった100年昔における挑戦の大きさが、よくわかる思いがした。

そのパイオニアの思いを引き継いで日本山岳会は生まれ、挑戦が行われてきた。そして気がついてみると、今の時代に100年昔のレベルのパイオニアワークを、山において見つけるのが難しくなつてしまつていた。さてこれから我々が持つレベルの高い未知への挑戦の精神はどこに向かうのだろうか。

日本山岳会が目指すのは、単なる山だけではなく、挑戦に値する未知なる「山」ではないのか。そう考えると答が見つけやすくなる。

南極に昭和基地ができたときに

その未知なる世界に挑戦し、さらに越冬という未知に挑んだのは山岳人のパイオニア精神であつた。

それにより切り開かれた道が拡がって今日の南極観測があり、オゾンホールが発見され、隕石から水から地球の気温と空気の歴史が解き明かされ、未来への予測と警告が出されるようになっていく。

マナスル登頂は国民を勇気づけて戦後の復興に貢献した。高所登山を契機にして開発された保存食品や装備の技術が今日の日常生活を豊かにしてきた。

自分たちが自覚していたかは別にして、我々は広く世界をリードしたパイオニアであつたのだ。

我々にとっての「山」とは高く聳える岩や、生物を宿した土の塊

だけではなく、挑戦に値する「高きもの」なのではないだろうか。

挑戦によって道が開けていく、そのようなパイオニアの役が我々にはあるのではないか。

山に登っていた人で、そののち登山以外の世界で挑戦をしている人を多く見るが、それもその人にとつての「山」に違いない。

そのように考えると、エヴェレストより高い山はいくらでもあることに気がつく。

それがいろいろとある中でも、何といつても人間の行動の最高峰は、地球の温暖化を防ぎ、人類の持続的な生存の道を残すことである。そしてそれが山岳人の活動領域のすぐ隣にあるのだと気づくのである。

山では自然に肌が接している。自然からの恩恵を最も受けている場でもある。また変化の影響を察知できる場でもある。氷河の後退や異常な雪崩や、冬の積雪が変わったということがときセンサーの役割としても先端にいる。例えば雷鳥の世界を守ることは人間の生存を守る対策のひな型でもある。

地上ではほとんど忘れられている気圧の変化に山では敏感になる。私たちは空気に押さえられて生きていることを知っている。

ただこのことから地球を被う空気の量や二酸化炭素の量を類推する人は少ないだろう。地球の表面積から計算すると、二酸化炭素の量は炭素換算で何と6000億トという数字になる。この中の1000億トぐらいの炭素（以下Cと表す）は、ここ200年ぐらいの間に約200億人の生活と活動によつて増えたものらしい。そして今の調子で何もしなければ1000億トぐらいのCを増やすのに100年もかからない。

1000億トのCが増えた地球は、一番正しそうな予測で4℃の気温上昇と2メートルの海面上昇である。

100年で東京は奄美大島の気温になり、東京の気温は稚内の緯度に行ってしまう。この急激な変化に植物の移動はついていけないのだろうか（多分追いつけない）、作物は食料生産は、異常な気象現象、公害の増加、害虫、疫病など、温暖化から起きることに、人間はどれだけついていけるだろうか……。

人間の欲は変わらず、行動は拡大していく。しかし限られた範囲に閉じ込められた世界である山では、有限なモノの活用を考える。

地球から掘り出す資源やエネルギーは有限であり、仮に人類の歴史をあと5000年だとするならば（過去5000年ぐらいが解っているからその中間点を現在としてみた、またこれぐらいは生きな」と恐竜に恥ずかしいのでは）、その有限の地下資源は毎年5000分の1だけ使つてよいはずで、後は太陽の恵みを生かす生活に発展すべきなのだが、なかなかそうは行かない（原子力には人類を巻き込む危うさが消えないし、地熱エネルギーも僅かな量である）。

地球の物質（資源）は濃度を變えて分散して集まっている。だから採算を無視して探せば出てきてくれる。現在知られているのは1とも、0・1割とも言われる。これの中で固体で掘り出して固体で捨てられる物はまだ良いし、資源として循環できるが、ただ気体で放出されるものは始末が悪いのだ。

石油において確認埋蔵量という言葉がある。例えばサウジアラビアの確認埋蔵量は現在2600億バレルだと聞いて安心するが、もしこれを全部消費したとすれば290億トのCの放出だと考えると随分無意味な数字である気がしてくる。地球にストックされているであろう化石燃料は1000000億トのC以上だと言う恐ろしい数字もある。これを使い終わる前に人類はとくに絶滅している。

化石燃料の使用は、どんな用途で、どんな使い方をしても、地上に出したものは、固体で蓄積しなにかぎりは遅かれ早かれ空気中のCになる。だから本来は地下に閉じ込めておくべきものなのだ。

使うのなら吸収ささねばならない。切られた森も木材の形で長期間使われれば、その間中は有効なCのストックとなつてくれている。

省資源、リサイクル、二酸化炭素の排出を少なくする技術の開発。燃料電池、ハイブリッド。LN Gは石油より2割ぐらいいは良い、コジェネレーションはエネルギーを5割ぐらい取り出せる。太陽電池、風力発電、二酸化炭素の海底

固定、これらの努力はされている。燃料電池は水素を作るときにエネルギーを使うし、宇宙でのソーラ発電も地球へ電磁波で送るのにまだ難関がある。つまり二酸化炭素を排出しないでエネルギーを取り出して人が生活するのはまだなかなか難しいのだ。

これに対して、二酸化炭素を収支を黒で安全に吸収する技術人間はまだ持っていない。

遠くの太陽がやっている核融合の研究はあるのに、光合成を人がやる研究の話をまだ聞かない。

しかし植物はそれをたやすく行っている、それは近くにいます。

地球のC循環を考えてみる。海と森林・土壌が約半々で全部で2000億トのCが自然発生して自然吸収をしている。その循環の中に人は住み、人間の出している70億ト分のCだけ増えている。この中で森林伐採で10〜20億トのC、化石燃料消費で60億トのC。

我々人間の呼吸量を計算すると、60億人で6億トの排出になるから意外にも大きい。日本人のひとり分の排出は、その30倍ぐらい(日

本全体では世界の5^{パーセント})。

森林は炭素を蓄えてくれている。地上に3000億ト。土壌中に6000億ト以上のCを。

この値が不思議にも大気中の量となんとなく近い数字であることに注目してみたい。

これを減らすとすぐ大気に移行するし、一方吸収の効果も大きいと言える。

全世界の森林面積は38億ヘクタール(日本の約100倍、地球の陸地の約30%)。380億トのCの吸収であるとの単純計算になる。

この森林が地球上では毎年0・1億ヘクタール失われている。これもCの吸収源を失う形になっている。ここ20年で失われた森林は、3億ヘクタールの数値もある。これはCの吸収量で30億ト以上になる。

人類の発展の歴史は森林破壊の歴史でもあった、その過去の復元は難しいとしても、この最近の3億ヘクタールと今現在進行している破壊分ぐらいは人の力で戻したいものである。

その最近失われた森林の面積も

含めて考えると、幸いにも地球上には数億ヘクタールの可植面積(あえて「幸いに」と「植えることのできる面積」と言います)があり、それは幸いさらに増えていることになる。年間0・2億ヘクタールの復元ができたとして、30年たつてこれが成木の葉で被われたとしたら、その時のその炭素吸収量は、大まかに1ヘクタールあたり毎年10トだとして1年に60億トになる。

この値を、前に述べた値と比較していただきたい。何と希望の持てる数字ではないか。

ただ、すでにお気づきだと思うが、この面積は日本の中にはなく、開発途上国の中にあるのである。

開発途上国での二酸化炭素排出は今後ある程度増える、先進国が省エネルギーを進め、リサイクルを進め、地球資源の総消費を少ない方向に進め得たとする。

人口増はいつか止まり、全体の二酸化炭素排出を減らして、森林による吸収を増やして、早く地球を覆う大気の中のCの増加を止めねばならない。

もし人が「木を植えることで欲望が満たされる」動物になるならば(人の変化は早いことがある)、他の努力とあいまって、地球は人間を持続的に生かさせてくれるのではないか。

そして山に登る人間には、その先鞭をつける役があるのではないだろうか。

これこそ未登の「エヴェレストより高い山」のひとつなのではないだろうか。

人類の遭難を目前にして、体と汗でそれを防ぐことを始める。そういう名譽ある先導役を我々が担えないものかと思うのだ。

近く創立100周年を迎えるこの機会に、パイオニアの集団として、このような視点と行動を持って、いかと心から願うものである。

(注:ここでは分かりやすいように、二酸化炭素を炭素換算して示し、炭素はCと表現した。使ったデータは環境ハンドブック(産業環境管理協会、地球環境情報(ダイアモンド社)、地球温暖化対策と環境税(ぎょうせい)、地球温暖化・日本はどうなる(環境庁・読売新聞)、環境リテラシー(リベラタ出版)その他であり、参考にした文献資料や情報の中の数字を基礎に計算して使った)

100周年記念事業の考え方

平林 克敏

去る10月25日、理事、評議員、支部長の方々にご出席いただき100周年記念事業関係者との合同会議を開催しました。今日まで進めてきた100周年記念事業の概要について、各担当委員長より説明し、多くの皆様からご意見をお聞きすることができました。当会の様々な運営にかかわる全関係者が一堂に会して協議するなど、近年始めてのことであり、正に100周年記念事業にふさわしい集いでした。

当会は登山を通して様々な分野で活動している人たちによって構成される日本唯一の山岳クラブでありますから、100周年を迎えるに際しては登山文化事業の集大成ともいえる諸活動を実施していかなければなりません。この意味から実行委員会の下に5つの委員会を設置し、さらにそれぞれの委員会の下に13のプロジェクト別の委員会を設け多岐にわたる事業と行事を推進することとしたものです。これらの事業は「国内外登山」と「文化事業」の二分野に大別され、さらに細分化された事業に発展させ、様々なプロジェクトを実施するものであります。

これらの事業の中を流れる一貫した考え方、すなわち、100周年記念事業の実施の理念は、諸先輩が培ってきた「伝統をいかに表現するか」またさらなる次世代を考え「将来に結びつく事業に重きを置き」「全員参加をモットー」とした考え方にに基づき実施していくものです。

各委員会の企画・実施項目は今後本誌「100周年ニュース」を通じ、その都度詳細を掲載いたしますが、各分野における重要な点を以下のように考えています。

1、「国内外登山」については、①若者が育ち、夢が具現できる登山のあり方を内外に求めるほか、会員の86パーセントを占める②中高年登山者層に魅力的なサービスの提供、また③各支部で立案実施する登山への支援など、3つの方針のもと、若い人に対する積極的な支援の姿勢を打ち出し、未踏の地への自主的な計画の奨励などを織り込んでいます。

北海道の宗谷岬から、九州の佐多岬を結ぶ「中

央大分水嶺踏査」や戦前戦後を通して僻遠の地を踏査し、また、初登頂を成し遂げた先人たちの業績を辿る「日本人の足跡を訪ねて」など全員参加にふさわしい事業も加えています。

2、「文化事業」については、長年継続中の「百年史の刊行」を将来に残る、形ある、最も重要な事業として進めてまいりました。この編纂事業は9年間にわたり編集準備を続けてきたもので、近代登山発展と当会の歴史を新しい視点から見直し、集大成しようとするものです。また、集められた膨大な資料を整理し、将来に備えることも考えられております。英文ジャーナルも編集方針が決定し、『Japanese Alpine News』の特集号として『日本のアルピニズムと登山文化』を発刊することとし、当会を世界にアピールする良い機会と考え編纂を進めているものです。

『日本山岳誌』も各支部の協力により既に出稿をすませております。

また、記念フォーラム委員会も多くの行事項目を掲げ、各支部とともに実施する計画を加えています。支部独自の行事予定も煮詰まってきたおり、多彩な計画に期待するとともにできうる限りの支援をしたいものと考えています。特に、「日本山岳会の将来を考える」(仮称)をテーマに各ブロックごとにフォーラムを開扉し、その成果を持ち寄り本部で開催する100周年記念フォーラムのメインテーマとして実施する案を検討しております。高尾の森委員会、図書展委員会、医療ハンドブック委員会など正に当会の文化事業といえる計画が着実に進んでおります。

3、祭りごととはなるべく地味に行い、実質を高めることが今の時代に見合った事との考えから、総合式典や支部のブロック別式典は多くの事業への参加と、その成功の喜びを共有する「多くの会員の集いの場」としたいものと考えます。

以上は、実行計画の一例とその要点を紹介し、各々の考え方を示すものですが、要は事業委員会の各組織がいかに支部ならびに多くの会員と協力、連帯し、この事業を成功に導くかであります。会員の皆様の支援と協力を心よりお願いいたします。

報告

REPORT
11月

図書委員会

富士吉田口登山道の視察

9月12日に図書委員会有志が富士吉田を出発点として、吉田口登山道を麓から5合目まで登った。

バス道路開通以来見捨てられたも同然で荒廃の目立った旧道を、復興再生させようと地元の人々が念願していた。文化庁等の支援を受けて数年前から行われていた修復事業が一段落した。その事業の推進に関与した人々の招請を受けての視察であった。

雨水によって道が削られないようにするための吸水の工夫、あるいは谷へ誘導して水を道から逸らせるための方策に新機軸が見られた。それらの工夫が効果を発揮するかどうか、興味深い実験である。樹林の中を歩むこと自体が楽しみを与えてくれるこの旧道の将来

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

について、日本山岳会員たちの建設的な助言を地元では期待している。季節を問わず新しくなった旧道をたどってこらになることをおすすめしたい。

なお、この旧道歩きは図書委員会の行事「古道を歩く」の本年度の行事であったが、日時設定と目的の関係で、公募のかたちを取らないこととしたものである。

(宮下 啓三)

山研運営委員会

山研プチ・オートムコンサート

山研に宿泊する機会にやっと恵まれた。山研運営委員会主催のプチ・オートムコンサートにチロル音楽とワインに誘われて参加した。当日、私は中の湯から焼岳に登り上高地に下山し、ひと汗かいて

から山研に到着。途中から降りだした雨は本降りとなっていた。

1階の食堂には、すでにハープやチャター、手巻きオルガンなど珍しい楽器が準備されていた。本職はだしの坂本委員の料理に舌鼓をうち、ワインを酌み交わし大いに盛りあがる。食後、アンサンブル「ヤーガハイツル」の3人を迎え、コンサートが始まる。水谷夫妻のアルプス民謡音楽の演奏と、熱田氏のヨーデルの歌声に聞き惚れながら、秋の夜はふけていった。26名でこの時間を独占してしまうとは、なんとぜいたくなことだろう。

食欲の秋と、芸術の秋を満喫した参加者は、満足げに降りしきる雨のなかに帰路についた。お世話いただいた「シェフ」の坂本委員はじめ、山研運営委員の皆様感謝いたします。(染谷 美佐子)

山研閉所のお知らせ

お世話になった上高地の山研研究所(山荘)は11月8日で冬期閉所となりました。

年末年始の短期オープンはありませんが、来年春またお会いしましょう。半年間ありがとうございました。(管理人 木村太郎・弥生)

▲世界的に類を見ない貴重な探検記録

禁断のアフガーニスターン・パミール紀行

ビクトリア湖畔

——ワハーン回廊の山・湖・人——

平位 剛 著

A5判 480頁 定価3,800円

地政的理由から永らく外人の入域が閉ざされていたアフガーニスターン東北部に白腸のように突出するワハーン回廊へ故マースド将軍に庇護され、1999～2001年の3年間探検に入った世界的に類を見ない貴重な探検記録。



◎好評発売中!!

定価(本体33,000円+税)

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

[付]カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入
385ページ B全判地図13葉
宮森常雄(秋父宮記念山岳賞受賞)・
雁部貞夫 共著 ・カテゴリーをご請求下さい

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

北海道支部

大塚武元支部長を偲んで 神威岳登山

昭和58年8月、支部長だった大塚武氏が日高山脈神威岳に単独登山、行方不明となり報道されたのは27日。多くの仲間たちが捜索に全力を尽くしたが、残念ながら9月4日に遺体となって発見された。没後20年の追悼集会を平成15年7月12、13日に実施。ご子息の大塚謙一氏を始め、北九州、関西などから34人が集まり、神威岳山荘前で遺影を飾り追悼式を挙行。翌朝4時45分、山頂組、慰霊碑参拝組に分かれて小屋を出発。ニシユオマナイ川の水量は少なくて

助かったが、遡行を極力避け、巻けるところは巻いて登った。

流木が山積している下二股でレリーフを発見、黙祷を捧げて記念写真を撮る。この頃から霧雨が強く降りだし、上二股の尾根取り付き地点で山頂組と下山組に再編成。大塚氏ら17人が頂上を目指すことになる。下二股では新妻支部長らがレリーフ前に祭壇を作って待つておられた。

小屋に戻ると本部隊によりストープが焚かれ、食事の用意がされていた。午後3時過ぎ、山頂組が雨に打たれながら小屋に到着。小屋前の祭壇で解散式を行い、献花を全員の手で川に流して追悼集会を終えた。

(鈴木 和夫)

上二股で下山組に見送られ、雨の強くなるなかを尾根取り付き地点で沢靴に履き替え、急な斜面を両手で濡れた笹をつかみながら一歩一歩、高みへと登る。10時40分念願の頂上に立つ。無風状態で暖かい。神威岳の上部だけが青空だった。周囲の山がガスで見えなかったが、大塚氏は父君を追想し、辺り感慨深げに見回していた。昼食後下山、下るにしたがい天

岐阜支部

夏の北アルプス山行報告

候は再び雨模様、水量が増している。慎重に徒渉を繰り返す。笹藪を漕ぎ、全身ずぶ濡れになって小屋に到着。暖かいストープが何よりだった。

(漆崎 隆)

今年度、岐阜支部として初めて企画した北アルプス山行。安全を第一にクラシックルートを選んだ。

8月2日、安曇村役場のある島島から谷沿いに右岸を歩き始めると、ルートの案内が出てくる。峠まで16^キ、標高差1400^メがあり、9名のメンバーは一樣に気を引き締める。所要所にははしごなどがかかっている危険な箇所はなく、まもなく無人の岩魚留小屋に着き、カツラの太木の下で遅い昼食をとる。

大休止の後、徐々に高度を上げていき、やがて力水と名付けられた水場にさしかかる。ここから標高差400^メ超え、今日一番の急登が始まるが、峠からの穂高岳の展望が待っていると思えば勇気百倍。一気に駆け上がり、全員のリント場を確保する。今日は一年の



急登を登り終え、徳本峠にて

うち一番混み合うと聞いていたとおり、小屋もテントも満員だった。3日、モルゲンルートに輝く残雪の穂高連峰から元気をもらい、小屋の脇から大滝山に続く中村新道に歩を進める。アップダウンを繰り返して、初めて展望が開けたところがその名のとおり明神見晴台である。再びダケカンバなどの樹林に入り、大滝見台に着く。朽ちた櫓から槍ヶ岳の展望が良い。ここからグングン高度を下げて小さな池を過ぎ、シラビソの樹林帯の山腹を巻いて大滝山の登りにさしかかる。一面のお花畑になり、最後の急登も知らず知らずのうちに大滝山に着く。遮るものなしの山頂で昼食を済ませ、遙か遠くに

見える蝶ヶ岳に向けて歩き始める。

2542¹地点を過ぎ、いったん鞍部に下がってからの最後の登り返しが辛い。三股からの道が右から一緒になれば蝶ヶ岳ヒュッテは一投足の距離。小屋で今宵の寝床を確保した後、蝶ヶ岳を1時間余りで往復。穂高から槍へ連なる北アルプスの核心部を余すところなく脳裏に刻むことができた。

4日、5時ちようどのこ来光を眺め、遠く富士山や南アルプス、八ヶ岳等を展望して、5時半に後ろ髪を引かれる思いで蝶ヶ岳を後にする。15分も歩くと妖精の池と称する池塘の脇を通る。ここもみことなお花畑である。徐々に高度を下げ標高2000¹を過ぎる辺りからジグザグの急な下りになり、登りのパーティーと行き交うようになる。やがて梓川のせせらぎが聞こえ、徳沢の分岐は近い。

昨日売り切れて脳裏を離れなかった温かいうどんで全員が祝杯。天候に恵まれたこともあったが、何よりもチームワークと助け合いの精神でまたとない思い出を刻むことができ、歓喜の握手と感涙のうちにそれぞれの家路についた。

(藤井 法道)

富山支部

支部創立55周年記念山行

今年、富山支部創立55周年を迎え、5年ごとに実施している記念山行を「利尻岳・アポイ岳と礼文島探訪」と銘打って8月13日から17日かけて行った。

遅れてくる1名を除き、木戸支部長のほか11名が早朝、富山空港から羽田経由稚内へ飛び立つ。稚内でフェリーの待ち時間を利用して日本最北端の宗谷岬とノシャップ岬を観光の後、礼文島へ。

14日、花の島・礼文島と言われるだけあって、盛りは過ぎてい



霧の晴れ間の利尻岳山頂にて

が多くの花が見られる。明日の利尻岳への足慣らしのつもりで礼文岳(490¹)へ。利尻へのフェリーの時間もあって大変きつい往復であった。

15日、利尻岳への杓形見返台登山口から登り始める。ここから6合目の五葉の坂までは、名のおりトドマツ、エゾマツなどの樹林帯が続き眺望もきかない。避難小屋(800¹)まで来ると霧が晴れ、杓形がよく見える。駒犬の坂、夜明かしの坂急な登りが続く、三眺山までのつらい登りにイワギキョウが歓迎してくれた。

三眺山で山頂の霧が一瞬晴れ、眼前に頂上の岩峰が顔を見せる。とても高く大きく見え、圧倒されそうになる。ここから親不知子不知のガレ場をトラバースして、ガラガラ崩れる急な登山道を一気に登ると鴛泊からのコースの合流点で頂上はすぐ目の前であった。登山者であふれる頂上は、相変わらず霧に覆われ、ちよつと晴れてはまた眺望を隠す。記念撮影をして鴛泊への長い下りを、頂上を振り返りながら下る。

16日、今日は利尻島一周の観光、島には港を中心にした町が利尻岳

を取り巻くようにして点在している。地名はアイヌ語が多いが、本土から移民してきた人がつけた名もあり、富山県にある新湊市から移民してつけたという新湊という地名があり、大変親近感を覚えた。今日も相変わらず利尻岳は雲に覆われ顔を見せない。名残惜しく利尻を後にする。

17日、様似町の親子岩の民宿から朝食のおにぎりをザックに、花の名山・アポイ岳(810¹)登山口へ。早朝のため登山者はいない。整備された樹林帯の登山道を熊除けの鐘を鳴らしながら登ること1時間で避難小屋に到着。視界が開けるが、急な登り、高度をかせぐ。馬の背までアポイハハコ、エゾリムラサキなどの花を楽しみながら登る。アポイ岳では80種以上の高山植物が確認されているそう。朝霧も晴れ、太平洋や日高山系の末端の山並みもよく見える。

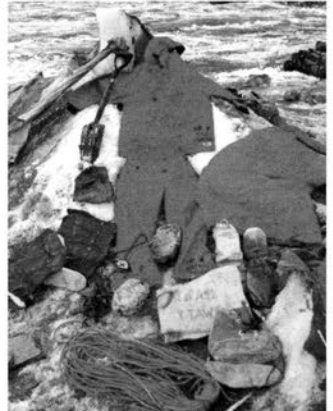
幌満お花畑への分岐を過ぎ最後の急坂を登りきると頂上であった。頂上には小さな社が奉つてあり、安全を祈願して下山する。アポイ山荘でひと風呂浴び、さっぱりして帰途につく。

(松本 睦男)

海外の山

パミール1974年

江本 嘉伸



29年も前……。地球温暖化のひとつのあらわれなのだろうか。氷河から出てきた装備類。(写真:ボルコフ隊提供)

この夏、サンクト・ペテルブルグに住む登山家、ミハイル・ボルコフは仲間たちとキルギスの山に行き、レーニン峰に近い氷河で日本人のものとのおもわれる遺留品を発見した。裂けたテント、4つの寝袋、4組のアイゼン、衣類には日本語とみられる字が書かれている。

「遺体はなかった。咄嗟に脱出できたのかもしれないし、もしかしたら遺族にとって大切な遺品かもしれない。写真を送ります」と、親切なロシアの登山家は日本山岳会あてにメールしてきた。10月28日のことだ。「おそらく1980年代のものではないか、と思う」と、ボルコフは付け加えた。写真の中には無残に破れたテント、スコップ、赤いヤッケ上下、青いオーバーシューズ、「NUJAC Y・TAWA」という字が書かれた黄色いシートのようなのがつつていた。

80年代にパミールで4人もの日本人が遭難した事故……？

メールを受けた海外委員会の間で、情報が飛び交い、ミステリーはあつという間に解決した。海外担当理事の田村俊介自身がゼネラル・マネージャーとして参加した「新潟大学山の会・大阪外国語大学山岳会パミール登山隊」の遺留品だったのだ。年代は、なんと1974年。

ハバロフスクと姉妹都市関係にある新潟の大学として、新潟大学は、かねてから「対岸のソ連の山、とりわけパミールの高峰、コムユニズム峰(7495m)」に的をしぼり、ロシア語が堪能でソ連の山事情に詳しい、大阪外大OBの田村の協力を得て登山許可を交渉してきた。パミールの7000m峰に各国の登山家たちが着目していた時代である。ソ連のスポーツ委員会は、1974年「パミール国際キャンプ」というか

たちで、外国隊を受け入れることとし、新潟大学隊にも招請状が届いた。めざすコムユニズム峰ではなく、すでに多くの登頂者を出しているレーニン峰(7134m)であることが不満だったが、機会を逃したくないと、大阪外大との合同のかたちで参加したのである。

事故は、74年7月23日、起きた。

5人がルートに決めたクルイレンコ峠への急な雪面を荷上げし、下り始めた頃、雪崩が発生、C2用の装備、食料のすべてをもつていかれたのである。マグニチュード7の地震が原因だった、と後で伝えられた。

「危なかったです。アメリカ隊の4人はクレヴァスに飛び込んで助かったし、私たちも下山が遅れていたらどうなっていたか……」当時23歳、社会人2年生だった田和芳郎は語る。マ・コムニズムと書かれた遺留品の所有者は、やがて53歳になる日本山岳会員である。

真の悲劇は、この後に起きた。

失った装備をなんとか融通しあい、新潟大隊は7月28日、ルートを変更し、リプキン稜、ラズジェーリナヤ稜の2つのルートに分かれてレーニン峰への挑戦を再開した。リプキンのほうは、前後してソ連選抜女性隊という、国を代表する強力な女性登

山家のチームが、やはりレーニン峰をめざしていた。

8月5日、風雪が強まる中、シャターエヴァ率いる8人は登頂を果たしたが、頂上直下で悪天候につかまった。疲労困憊したひとりが死に、他のメンバーもテントが破れ、強風の稜線に放り出された。ベースキャンプから「下に日本隊がいる。そこまで頑張れ」と必死の励ましが続いた。女性隊はすさまじい風雪のなか、2日間死力を尽くした。しかし、状況はあまりにも過酷だった。シャターエヴァの「ムイ ウミラーエム(私たち、もう死にます)……」の声を最後に、全員帰らぬ人となった。「ルートの途中で出会った時、リングをもらったりした。優しくて、あんなに強い女性たちが……と信じられなかったです」この時、ソ連女性隊の遺体を確認しながら登頂した佐藤登は回想する。写真の赤いヤッケの持ち主は、当時30歳だった。

ソ連登山史上痛恨の1ページとして記録される29年前の女性隊大遭難を思い出させた1通のメールと写真。その後モスクワでソ連山岳連盟の事務局長をしていたシャターエフと会い、妻の最後について話を聞いた筆者にとっても、他人事でないでござった。

Climbing & Medicine・26

登山における食欲低下のメカニズム

キムチパワーで克服できるか

内藤 広郎

高所登山を安全に遂行するためにはエネルギーが必要です。そのためには経口的に食物を摂取し、小腸から吸収して、これをエネルギー源にする以外にありません。ところが、特に高所における低酸素、低温、低圧環境のもとでは食べなくては行けないとわかっていても全く食べられないということがあります。仮に、このような過酷な環境でも食物を摂取できれば、その後の食物の栄養吸収と代謝がどのように変動しているかは興味深い問題ですが、未だに研究は十分ではありません。

高所では、経口摂取できない、すなわち著しく食欲が抑制される状況がありますが、その原因についても、わからないことだらけです。ようやく、低酸素、低温、低圧環境にさらされると食欲を抑制するホルモンが分泌されるという報告などが最近みられるようになりました。しかし、やはり食欲を抑制すると思われる胃排出の遅れや胃食道逆流の増悪、胃酸分泌過剰やス

トレス性胃潰瘍の発症、空腹期に見られる周期的小腸運動の消失、などがみられるか否かについては、不明なことばかりです。

私のこれまでのラットを用いた研究では、低温、低酸素下でラットを拘束すると胃粘膜にストレス潰瘍が発生しますが、胃酸分泌抑制剤や胃粘膜保護剤でこれらの発生が抑制されることがわかりました。最近では、胃排出を促すような消化管運動機能改善剤が臨床の現場では多く使われていますが、これらは高所登山時の食欲低下を改善する可能性があります。したがって、胃酸分泌抑制剤、胃粘膜保護剤、消化管運動機能改善剤を服用しながら登山すれば食欲の低下は軽度には抑えられる可能性はあります。

しかし、クライマーの中には薬剤に頼る登山を嫌う傾向があるのも事実です。そのような場合には、キムチの主成分であるカプサイシンの作用が注目されるでしょう。カプサイシンは最近の研究で、胃排出促進や小腸運動機能促進作用、少量であれば胃粘膜保護作用があることがわかってきました。本年5月、三浦雄一郎氏が世界最高齢記録のエヴェレスト登頂を達成しましたが、どうやら彼らの食事にはキムチが大量に利用されていたようです。これから証拠を重ねて研究していく必要はありますが、今後の遠征ではキムチを食事に取り入れてみても良いかもしれません。

(本稿は、第23回日本登山医学会のシンポジウム「登山と栄養」(平成15年5月)で発表されたものの要旨です)

年次晩餐会のご案内

12月6日(土) 新高輪プリンスホテル
受け付け16時より、開宴18時
14時半より東京農大・エヴェレスト、ローツェ、明治大学・アンナプルナI峰南壁の報告および秩父宮記念山岳賞の受賞講演、16時より展示あり
翌日の記念懇親山行は高尾山にて



個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋市中区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

日本山岳会の稀覯本『高山深谷』

鈴木 正規

『高山深谷』は明治の山岳写真の黎明期にスタートした。これほど豪華な写真集を8冊まで仕上げた日本山岳会の編集者の根気と努力は、たとえ時代の背景を考慮に入れても、異常なほどの執念深さを感じさせる。

それというのも、この本は9、10輯を除いて印刷された写真集ではなく、印画紙を一枚一枚台紙に貼りつけた、いわゆるアルバムであったからだ。発行部数も最高で130部、せいぜい100部前後だったという。

明治38年10月に日本山岳会が発

足、翌39年に機関誌『山岳』の発行の話が進み、小島氏や高野氏が『山岳』編集に精を出し始めるころ、高野氏らの手元に集まる山の写真を欲しいという人が増えてきた。それらの要求に音を上げた高野氏らは山岳会員たちとその事実を皆にはかつて、皆の写真を集めてアルバムを作ることになった。これが明治42年から43年にかけてのことだった。

こうしてできたのが明治43年の『高山深谷』の第1輯である。題名は小島鳥水氏がその著書用に用意しておいたものを譲られたという。

最初は100部くらいのつもりで予約をとったが半分しか申し込みにがなくてがっかりしたが、しかし、石崎光瑠氏の「立山大汝より



上・第7輯 下・第6輯

信飛境上の諸峯を望む」や辻本氏の「薬師岳のカール」などが当時の山岳人をびつくりさせたものだったとの、何ごとにも凝り性の高野氏のこと、この調子で造本にも全力を注ぎ、第1輯のような豪華本を作り上げたのである。

各輯の内容を造本内容、発行年月、発行部数は次の通りである。

【第1輯】明治43年4月発行。発行部数70部限定版。茶色厚紙帙入り。キャビネ印画12図を台紙へ貼付。

【第2輯】明治44年発行。発行部数100部限定。灰色霜降厚紙帙入り。キャビネ印画12葉を台紙へ貼付。

【第3輯】明治45年4月発行。発行部数125部限定、ナンバー入り。表紙は小豆色の木綿布地に赤

と黒で印譜を更紗風に染色。目次、扉は中村清太郎画伯装画。別に解説書を添う。

【第4輯】大正2年3月発行。発行部数100部限定。表紙は海鳥の床革装、武井眞澄意匠、香取秀眞鑄造の焼印2箇所を押す。タイトルページは中村装画、木綿布地に更紗風印刷。別冊の解説書を添う。

【第5輯】大正3年4月発行。発行部数120部限定。表紙はベニヤ板に茨木猪之吉画伯図案および製作(肉筆)の焦画。目次および解説のカットは中村画伯の図案、同じ手彩色。

【第6輯】大正4年5月発行。発行部数130部限定。表紙は油絵用カンバスに茨木画伯の瑞西の牧牛の図に同画伯が油絵具で手彩色(5色)している。題字は横山大観氏の肉筆。別冊の解説書は中村画伯図案。

【第7輯】大正5年5月発行。発行部数は不明。表紙は中国産絹どんに、中村画伯図案を更紗風に染め付け、見返しに冠松次郎氏の自書自筆の印を押す。別冊解説書表紙は茨木画伯図案に肉筆で手彩色(2色)にしたもの。

「第8輯」大正6年4月発行。発行部数100部限定。表紙は紺絹布製に茨木画伯木版画を貼付。扉の図案も茨木画伯。

「第9輯」昭和8年8月発行。発行部数は不明。

第9輯、第10輯は日本山岳会の発行からはなれ、第9輯は「梓書房」から発行された。「高山深谷」として最初に公刊されたもので、印刷造本もすばらしい。写真の主題と関係ある随筆50編が著名登山家によって執筆されていて、写真は50ページ、本文は100ページ。

「第10輯」昭和16年12月発行。発行部数は不明。発行所はアルス書房。第9輯に較べて写真本位となり、ヒマラヤ、アルプスのもの10点を加えて100点。それぞれに撮影者の解説とデータを対頁に載せている。第9輯と第10輯は日本が太平洋戦争に突入した直後の時代であり、印刷、製本ともども、つくりが非常に落ちているのが目につく。同時に「高山深谷」はこの年に事実上の終末となり廃刊されたのである。

日本山岳会の私刊本の8冊は、山岳書中随一の古典であろう。

英国の山3峰

伊佐 九三四郎

今年の9月、英国の山3峰に登った。この国の最高峰——といっても1344mだが、スコットランドのベン・ネビスと、ロソホロームンドの水辺近いベン・ローモンド、そして湖水地方にあつてイングランドの最高峰スコッフェルバイクである。このあたり特有の雨や霧にあわず、連日天候に恵まれた山行であつた。

前記2山については辻村伊助(以下伊助)の「ハイランド」があるが、ハンディな平凡社ライブラリーを持参し、紀行に重ね合わせるような気分であつた。

ベン・ネビスは、登山口のフォートウィリアムの町から山塊の一部が眺められる。牧場を抜けてブロックン(ワラビ)におおわれた山腹をゆるやかに巻き、500mからジグザグに登って岩石累々の広々とした山稜に達する山で、登山道は石畳などよく整備されていた。私たちは8時間もかけてのんびり歩きを楽しんだが、翌日登山レースが行われ優勝者は1時間30

分ほどで走りきった、と新聞が報じていた。

伊助が霧雨のなかに登ったのは大正3年6月のことだつた。登山口近くに2軒の農家があり、追いかけてきた番人に入山料?1シリングを払って立つた山頂には石を積み上げたベンネビスサミットホテルがあり、彼は6ペンスの紅茶を飲んで温まっている。我々のガイド、ポウルの説明では、100年ほど前山頂直下にホテルが、山頂にホテルの出店や気象観測所があつたといひ、今でも下のホテル跡には馬の餌を入れた石小屋跡があつたといひ、今でも下のホテル

あり、山頂にはかなりの石垣が残つていた。10年前に登つた大森久雄氏によると当時はシェルトーがあつた由(「山」559号)だが、それはもうなかった。

最高峰といつても低山だが、北緯57度でカムチャツカと同緯度なので、雨や霧に遭わなかったものの、風が強く気温が急速に下がりが、サンドイッチをつかむ指が震えて、テルモスの紅茶にホッとひと息つく思いだつた。その山上でバグパイプを演奏する大男がいた。スコットランドの民謡を2、3曲吹いた後、最後に「蛍の光」が流れる

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。

あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。



お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ**
<http://www.fellow-travel.co.jp/>
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp
〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催:株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会員
国土交通大臣登録旅行業664号 協賛:ウェンゲン観光局・ツェルマット観光局 後援:スイス政府観光局

と拍手がわいて心も和んだ。

日本でもおなじみのこれもスコットランド民謡「ロッホ・ローモンド」の湖畔に立つベン・ローモンドは、スコッチウイスキーの樽にもなるオークの森を抜けて登った。すぐに森林帯が切れると、草付きの広々とした尾根に出たところで眼下に松島のような小島を散りばめたローモンドの湖水がひらけ、その奥に大西洋に続く海が望まれた。氷河期が生んだ細長い湖が本島北部には多いが、日本ならここに橋を何本もかけてたちまち景観を損ってしまうにちがいない、などと反射的に思ってしまうような美しい眺めだ。石畳が終って間もなく露岩の頂に立つ。太古の昔、全面を氷河が削り取った、たおやかな丘陵が八方に広がる開放的な岩の山頂だった。

元小学校の教師のガイド、ポウルは「今日は往復じゃなく、あの尾根を下りましょう」という。指さす尾根は伊助の逆コースをとっているように思われて心が弾んだ。初め岩の急坂、やがて動物の足跡がある湿地帯を抜け、ブロックンが茂る斜面を下り続けて朝方の森へ戻ったのだが、文章から推して

彼は今日たどったコースを逆に歩いていることが確認された。

スコーフエルバイクは、スコーフエル地方のピークという意味らしい。ナショナルトラストの発祥の地、湖水地方の山でイングリッシュの最高峰だ。一見牧師風のガイド、ライトは長身で恐ろしく足が長い。歩き方がものすごく早いで、そのペースに合わせるのが大変だった。牧柵を抜けると山の向こうに遠くアイリッシュの海が見え、マン島の影が望まれる。湖畔にある建物を指して「我々山岳会のヒュッテだ」という。彼らは岩登りを好み、この山の岩場にもよく取り付くらしいが、山頂直下に少々もろそうな岩壁がバットレス状に広がっていた。

山頂は一面の岩礫で広々として、ほかの2山同様気分爽快な360度展望の山であった。下りは右側の道が続いて長い。かなり高いところまでハードウィックが何頭か登ってきているのに驚いたが、分厚い羊毛をまとっているの寒くはないのだろう。今年が出版100周年という『ピーターラビット』の著者ビアトリクス・ポターも飼っていたという大きな羊だ。

岩をまじえた草付きのゆったりした山なみと、どこまでも続く牧草地と、石積み白壁の民家のアクセント、それに最低限度の表示板しかない、美しい田舎の風物を堪能したイギリスの山旅であった。

金華山登頂5000回達成

原 満紀

世の中には全くもって信じられないようなことがあるものだ。日本山岳会岐阜支部所属の岡田清美氏(68歳)が、平成7年5月25日の退職後から、自分自身の健康管理と山登りのトレーニングを兼ねて、同市の金華山(329m)に、1日2〜3回のペースを目標にして登山を繰り返し、平成15年9月13日、ついに5000回登頂の快記録を達成した。

記念登頂会にはJACC関東圏の有志約10名と金華山同好会グループ「早朝会」のメンバーも加わり、およそ50人の山仲間たちが参加した。山頂の岐阜城資料館前にて盛大な祝賀会を開催、彼のとてもない快挙を全員で祝った。

金華山は麓の岐阜公園から頂上



金華山、岐阜城資料館前にて

まではロープウェイで3分で結ばれているが、いくつかある登山ルート歩いて登っても、30分から50分くらいの時間で山頂にたどりつくことができる岐阜市のシンボリックな山でもある。

彼の言葉を借りれば「私のいつもの登山は早朝が多い。ルートを覚えて上まで2往復するのが習慣であるが、大体始めるのは午前3時ころである。まだ鳥も眠っている朝の静かな山行で、たまにはタヌキの親子や、キツネを見かける。フクロウを見たこともあった」と思い出を語ってくれた。

それにしても8年余りの歳月で

短歌

ある日の山

逸見 征勝

佐保姫は溪深くみて紡ぐらし霞の
布の上の尾根行く

神域へ入り行く気配やせ尾根の白
山風露霧に吹かれて

わたすげは風の調べに数千の白き
マレット振りはじめたり

すくい飲む水にうつれる黄の影は
谷に老いたる柳のみみぢ

けものらの足跡つづく雪の道はが
れては降る霧水きらめく

俳句

上高地・山研

畑中 耕一

明神の雲吐ひてゐる墓蛙

無難作な蛇衣を脱ぐ橋の果て

荒梅雨や桂の下の佇まひ

河童忌や凡庸と老ゆる木のあり

青蛙桂の下崩かな

老木に声かけてゐる帰省かな

5000回も金華山に登ったとは、その精神力の強さに頭の下がる思いである。

JAC岐阜支部会員の奥様(育子さん)も、150回以上一緒に登られているとか、これからも健康に留意し、雨にも負けずに金華山登山を続けてほしいと願っている。

ウェストンと

北岳登頂時のエピソード

田畑 真一

明治35年8月、ウェストンは北岳へ登頂した。彼は芦安村(現在の南アルプス市)の村長・名取運一宅へ前泊、関係記事を書き残した(水野勉訳『日本アルプス再訪』)。

実は当時、ウェストンに接した名取の長女・静から伝わる言い伝えがあった。それも人に知られることもなく、静の孫・猪股靖氏(東京都在住)が記憶していた。猪股氏は静の長女・鈴菜の長男だ。平成15年8月28日、私は猪股氏の勤務先がある東京都港区東麻布へと向かった。以下、猪股氏に記

憶を確認いただいた。

昭和20年、猪股氏は縁故疎開ということで、神奈川県相模原町(現在の相模原市)当麻に住んでいた。幼少時の思い出だ。猪股氏の祖母・静も住んでいて、静は猪股氏をかわいがっていたという。その後、昭和22年から31年ごろ、猪股氏は東京都世田谷区奥沢に住むことになった。合計すると9年か10年くらいの間、静との生活が続いた。

それは昭和22年ごろから25、26年ごろにかけ、静から聞いた話だが、昭和23年ごろ、猪股氏は小学校の低学年だった。

さて、話の内容だ。芦安村では大きな話題だったという。南アルプスを初めて登るといふイギリス人のウェストンという人がやってきたからだ。村をあげての大騒ぎだったという。彼の来村も前もってわかっていたとのこと。だから毎日毎日がそうじ。ふだん使っていない部屋までもそうじした。彼に使ってもらうためだった。

当日はいろんなごちそうを出したが、静は配膳の手伝いをしたとのことだ。私は名取家の戸籍謄本(除籍簿)を入手。静の年齢を試

算した。静は明治21年8月18日生れであり、当時14歳だったことになる。現在なら中学校の3年生くらい。純朴で働き者の少女像が見えてくる。

名取運一も気を配り、準備のために走りまわる日々だったという。近所の人々も集まってきて、もの珍しそうなのにぞきこんだという。猪股氏は1回だけでなく、同じ話を何回となく聞いたという。静にしてみれば、鮮烈な思い出だったからに違いない。

私は『日本アルプス再訪』の記事との整合性を重視し、興味津々だ。

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



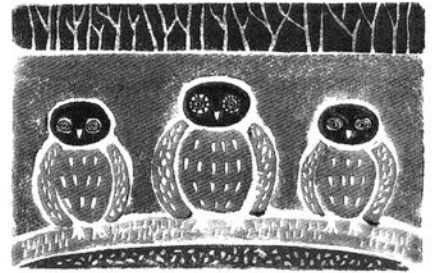
古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮 4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

高桑信一・著

『山の仕事、山の暮ら』

ゼンマイ採り、山椒魚採り、鉄砲撃ち、ワカン作り、炭焼き、漆掻き、天然氷造りなど20編にわたる山暮らしと山仕事ひとすじの私たちのルポルタージュ集。多くのクライマーに汚されていない奥深い谷を廻行し、豪雪の山々にわけ入った著者ならではの思いが各編にこもる。

10年以上にわたり取材を続けていて、すでに死亡したり、山を下りた人々もいることだろう。山に登る私たちの多くは、こうした山びとの暮らしや仕事ぶりに関心を持つているけれども、読み進む

と、実際の山暮らしは私たち登山者、訪問者の想像や理解とずいぶん違っている側面が多いことを知るのである。

山奥で働く人たちは、高度経済成長や自然環境の変化に翻弄されつつもなお、都会や外の世界とは無関係に自ら選択したり、父祖から継承し、あるいは運命のいたずらからと、動機はさまざまだが、必死に仕事に取り組んでいるその姿が生きてと語られている。

この山人たちに共通していることは、山と山の仕事を熟知していないと暮らしにくいということ、やつぱり山が好きだということだろう。そして、ほとんどの人たちは後継者をあてにはしていないのだ。これをさみしいと思うのは、私たち町の人間や旅行者としてのエゴではないか。消えゆくものへの郷愁だろう。

こうした多様で強烈な個性をもった山びと、滅びつつある仕事に打ち込む人たちにめぐりあい、親交を結んでいく著者の山旅は、どんなに充実していることだろうかと思わずにはいられない。

(松沢 節夫)

2002年12月 つり人社刊

446頁 2400円

織内信彦・著

『もうひとつの快晴の山』

名誉会員で元副会長を務めた織内信彦さんが2002年9月26日に永眠された。ご本人の希望で「お別れの会」が昨年11月25日に行われたが、その会のために織内さんの発表された多くの文章から遺稿集として急遽まとめられ出版されたのが本書である。

織内さんは90年の生涯で『偃松帯』(昭和16年)、『快晴の山』(昭和52年)の著作があり、日本山岳会の『山岳』、『山』への寄稿も多い。また、農大山岳部の部報、『山と溪谷』や『岳人』へも多くの文章を発表している。

本書には18歳の時に池の谷から早月尾根を経ての未開拓ルートに登高をふくむ『剣岳西面紀行』から、亡くなる直前に発表した「デル・グーテ・カメラードとリーダー章」まで、記録、随想、海外、論評の4章に13編がまとめられている。70年あまりにわたる山登りを愛した人生がうかがえる。

通読して驚かされるのは、織内

さんの生き方、山に対する考え方が終始一貫、筋が通っていることである。『山岳』や『山』に発表されたものは会員には覚えのある方も多いと思うが、農大山岳部の部報などに書かれたものや、戦時に書かれた「登山と時代」などは初めての方も多いのではないかと思います。

各編のあとに本書を編集した江本嘉伸、神長幹雄両氏による紹介の短文がつづられており、織内さんへの愛情あふれる良い文章で、この短文を読むだけでも織内さんの人柄をほうふつさせるものがある。表紙の絵は織内さんの作品、裏表紙は農大山岳部のリーダー章があしらわれている。

この『もうひとつの快晴の山』とは別に、織内さんが人生の最後の時を費やした27ページの文字どおりの小冊子『山と本と人』がある。平成13年11月に緑爽会の会合で日本山岳会の古い話を、と請われて講演したものをまとめたもので「山と本と人」と「アフガニスタン」の2編がおさまられている。「入会した頃(昭和15年)」や「小島鳥水の思い出」、「松方さんと社会主義思想」や「ブルジョワ・ア

ルピニズム」など大変興味深い。

講演のため時間をかけて準備した内容を半年かけて推敲を重ね、入院生活を余儀なくされ人生の残り時間の見えてきたなかで、活字の種類や大きさなど装丁の隅々まで目を通し織内流の冊子に仕上げられている。この冊子は最後の日々、入院生活のなかひとりひとりに「恵存」と揮毫し、ご自身で宛名まで書いて郵送されたものである。限定版で入手が難しいかと思うが『もうひとつの快晴の山』とあわせてぜひ一読をお勧めしたい。

(宮崎 紘一)

2002年11月25日 発行者・稲垣章子 157頁 送料とも1000円で頒布、申込みは事務局まで。

Ram Kumar Pandey・著 『Japanese Expedition Experiences in the nepal Himalaya』

トリブバン大学地理学教授のパンデイ先生は、1999年5月から国際交流基金のフェローとして9か月間日本に滞在された。この間各地を調査旅行して回り、多くの岳人に会って話を聞き、大阪市

立大学などで研究を行った。本書はこの成果をまとめた報告である。

本会の名誉会員であったクリシユナ・ヴァルマ氏の娘婿でもあるパンデイさんの業績と人となりは巻末10ページにおよぶ自己紹介を見ればよくわかるが、ユーモアを信条とし、児童文学や民話、美術工芸にも造詣が深い。日本への傾倒が強く、ネパールと日本との間の相互理解のために精力的に活動している人である。

ネパールをよく知る日本人は登山者が多いが、日本とネパールの関係の中でも登山がその重要な要素を占める。そこで研究テーマを「日本人のネパール・ヒマラヤにおける経験」という方向でまとめることにしたようだ。ネパール登山の経験者から話を聞くとともに、日本の土地柄を地理学的な視点からネパールの状況と比較して、それらを総合化しようとしている。

第1部ではかなり細かく登山の歴史や背景に触れる一方で、統計的な数字の並んだ表も多く使っていて、いつの間にか個別的内容が一般化された内容に移ってしまうこともあるが、この間隙を埋めるのが個人へのインタビューと、

登山者それぞれの紹介文であろう。第3部には個別に名前と写真で紹介されている岳人が17人、故人を含めていずれも日本山岳会の重鎮の方々である。話の内容は多岐に（登山以外にも）わたり、時代的にも幅があり、さらに筆者の感想も挟まって、焦点が定まらない感もあるが、細かい話には興味深いものが含まれる。

日本人の盛んなヒマラヤ登山の背後にある登山組織・クラブについても注目し、日本山岳会を含めてネパール遠征経験が多い8つの組織について具体的に言及している。日本山岳会についての紹介は細かく、歴代の会長名や創立委員のことまで記してある。

ヒマラヤの存在がネパールの人びとのあり方を決め、外国人の登山やトレッキングがネパール経済を支えているとすれば、将来のネパールもヒマラヤを資源としてうまく活用してゆくほかはない。パンデイ先生は結語の中でヒマラヤの国ネパールの持つ可能性をいくつもあげている。その資源を開発するためにはどうしても外国の援助に頼らざるを得ない。だがその前にネパール人自身がネパールを

知り、また外国人にネパールの良さを知らしめることはできる。

日本を知ろうとし、日本に友人を増やし、ネパールへの関心を高めること、それこそがこの本を書いた意味である。英語で書かれた故に、日本人にとっては、日本の登山状況が世界に紹介されるメリットがある。

(児玉 茂)

2003年 Nepal-Nippon Research Center発行 452頁 20%送料 年次晩餐会で見本を展示、希望者はその場で予約注文。または事務局田村まで申込みのこと。在庫僅少。

年末年始・カトマンズ行(成田発着)

ヒマラヤ越えフライト(第12回) 12/27(土)から1/5(月)まで10日間

ヒマラヤ越えが魅力の特別運行便 チベット高原上空からカトマンズへ

国土交通大臣登録旅行業第490号/出日本旅行業協会正会員 日本航空協賛会社 アルパインツアーズ株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911 大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557 e-mail:info@alpine-ts.co.jp http://www.alpine-tour.com

会務報告

9月理事会

日時 9月10日(水)18時30分～20時40分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」平山会長、芳賀、平林、橋本各副会長、藤本、今村、朴元、賛田、田村、黒川、野口、石田、篠崎、鳥居各理事、内田、一力各監事、宮崎、鰐坂、小倉(童)、西村各常任評議員
「委任」小川、大蔵、鈴木各理事、重廣常任評議員

【報告事項】

1 会報「山」9月号の内容について 今村

700号発刊を記念してカラー印刷とした。印刷費60万円程度の見込み。

2 予算管理月報 橋本

●100周年募金は8月31日現在559万円である。

●支部毎の集計などは別途インターネット委員会で作成し実施する。

3 「高尾の森づくりの会」へ補助金決定 篠崎

●国土緑化推進機構より213万円の補助金が決まった。

●JAC協賛の「らいちよう会議」が9月7日実施された。

4 「山岳」第98年企画 芳賀
別紙のとおり。

5 その他 藤本

●ポカラ山岳博物館の募金(目標、300万円)が集まらないので、有志の方々にはよろしくお願いしたい。

●11月14日から10日間、北海道支部ではポカラ山岳博物館のオープンに向けて協力団を送る。インターネットでもPRしている。有志の方々の参加をお願いしたい(詳細は総務まで)。

●同博物館のグランドオープン(2月5日)に訪問団をだすことを考えている。近く理事会で提案する。

【審議事項】

1 サンビューハイツ四番町201号室購入の件 橋本

●3600万円ですりに出ている201号室を購入したい。

●201号室を購入し104号室あるいは105号室などと等価交換することを考える。いずれにしても購入しないと交換交渉はでき

ないと提案があり、次のような意見があった。

●古い建物は修繕費が必要であり会員減少もあり大変な負担になることもあるので要注意ではないか。

●山岳会館を作ることはどうなるのか。 石田

●資金の固定化はいかなものか。

●財務委員会では、以前より上層階に売りが出たら購入し1階と交換することを考えるべきとの話が

あった。 賛田

●長期改善計画では「長期的に1階のルーム拡張」ということは明確になっている。

●何の目的で買うのか、キャッシュフローはどうなるのか明確にしてから実施することが大切ではないか。

●201号室の購入を決めたら会館を作る夢はするべきである。

以上のような検討がなされたが、最終的に常務理事会に一任して検討することになった。

2 日印合同東カラコルム登山隊のインド隊員サティア・ダム氏来日に関して、招へい状を出す件。

藤本(承認)

3 ブータン国観光局長と面談の件 藤本

10月2日5時より山岳会として、メトロポリタンホテルで、山岳会幹部と面談する。(決定)

4 海外登山基金委員会メンバーの件 橋本

別紙の9名が提案された。なお、本年度より審査内容はオープンにすることとした。(承認)

5 100周年記念事業計画の件
①記念事業推進組織 藤本

別紙のとおり決定したいむね提案された。なお、長期目標検討委員会は日本山岳会の次の100年を考える委員会である。

②各委員会の活動方針について
●別紙のごとく各委員会の活動方針、組織、予算が発表され、検討のうえ次回までに決定することとした。

●百年史の発行時期の問題(05/10もしくは06/5)、配布方法(有償もしくは無償)等については別途検討する。

以上の提案について、次のような意見があった。

●予算は各委員会と執行部で話し合い、じっくり検討したい。

冬期ローツエ南壁隊 いよいよ始動

実行委員長兼総隊長 尾上 昇

本会の100周年記念事業の一環として実施される冬期ローツエ南壁登山隊が、いよいよ本番に向けて始動しました。

東海支部は、このローツエ南壁に一昨年の冬登山隊を派遣しました。しかしながら、冬のヒマラヤの厳しい気象条件と、複数の隊員の体調不良が重なって、高度7600m地点で敗退を余儀なくされました。

東海支部は、その設立の動機が海外登山の実施にあったことから今日までに支部の派遣した登山隊は30隊近くに及んでいます。このなかには、アコンカグア南壁のフレンチルート第2登、マカルー南東稜の初登攀、ガウリサンカール南峰の初登頂、雪連峰の初登頂、クラウン峰の初登頂、ウルタルII峰の初登頂、K2の

登攀ルート



ニュールートからの登頂など、世界に通じる記録を残してきています。2001年には、支部の設立40周年を記念して、ローツエ南壁の冬期初登攀を試みました。ローツエ南壁は、高度差3000mを超す世界最大級の壁として知られていて、これまでに東海支部も含めて主な登山隊の挑戦は、20隊を超えています。

このうち、1990年の春、スロベニア出身のトモ・チェセンが単独で初登攀しています。しかし現在ではチェセンの記録は、そのあいまいな報告から疑惑の登攀とみなされています。その後、1990年秋、旧ソ連隊がチェセンルートの左側を極地法で攻めて登頂に成功して以来、ここ10年以上誰も成功していません。しかも冬期の試みは東海支部のみで、今回で2度目の挑戦となります。成功すればいうまでもなく、冬期の初登攀です。

隊は、第1ステップとして9月3日に日本を発ち、シシヤパンマ峰での高所順化登山を終えて10月25日に一時帰国しました。隊員全員余裕をもって中央峰に立つことができました。

11月2日、休養を兼ねて帰国していた隊員がカトマンズに向けて再出発しました。カトマンズで集結後、ローツエのベースへのキャラバンを開始し、11月10日頃ベース入りします。12月初めから本格的な登攀活動に入り、12月25日のクリスマス前後に登頂を予定しています。

最後になりましたが、本会の100周年記念事業として認めていただきましたこと、そして多くの方々から賜りましたご厚情に、衷心より感謝を申し上げます。

日本山岳会創立100周年記念 日本山岳会東海支部 冬期ローツエ南壁登山隊2003

総隊長・尾上昇、隊長・田辺治、隊員・鈴木正男、北村俊之、山本茂久、千田敦司、竹中吾郎

● 財務委員会として予算を厳しくせざるを得ないので協力をお願いしたい。 橋本

● 100周年記念の実施のためのスローガンを考えてほしい。 藤本

● 図書管理小委員会は将来財務委員会の所属から図書委員会に所属変更することを検討したい。 田村

● 総務委員会のコンピュータ(48・5万円)を新規に更新したい。事務局のリース更新と併せて検討する。

● 「100周年ニュース」を会報『山』に毎号1ページ出す。10月号に会長の挨拶を掲載するが、その後の号についてそれぞれの担当に経過報告、決定事項等を書いてもらいたい。 平山

● 名誉会員の選定について選考経過を公にしたい。 平山

会員異動(9月)

物故

出口一良(6700) 03・5・19
稲田静代(11434) 03・9・14

退会

内田玲子(9629)
廣松邦子(11987) 福岡

山岳遭難事故合同調査へのご協力お願い

総務および指導委員会

警察庁発表の平成14年度中における山岳遭難発生件数は、1348件、遭難者総数は、1631人であり、うち死者、行方不明者数は242人でした。対前年では発生件数は128件増加し、遭難者数は161人増加しました。そして、発生件数は、平成10年以降5年連続して1000件を超えています。特徴としては、40歳以上の中高年登山者の比率が高く、体力、技術の不足や、気象判断の誤り、装備の不備等、登山の基本的知識を欠いたことによる遭難が目立ち、登山計画書の未届けも多いことが指摘されています。

このような状況下で、抜本的な対策を講じるためには、早急に遭難の実態を把握する必要があります。しかしながら、事故調査データについては毎年の全国山岳遭難対策協議会で発表される警察庁がまとめた概要一覧に頼るしかないのが現状です。

そこで、日本山岳会では、日山協、都岳連、労山が昨年から開始し、成果をあげている統一様式による「山岳事故調査」に本格的に協力してまいります。

調査項目は警察庁のデータから一步進めて、複合型事故とも言える山岳遭難の実態を内的因子と外的因子から解析してゆくことを目的としたもので、すでに第1回報告書ができあがっています。

会員のみなさんが「山岳保険を請求する」部類の山岳事故に遭われた場合には、ぜひ、この調査活動にご協力いただきたいと思います。

調査表は、総務および指導委員会担当理事が管理していますので、お問い合わせは下記へお願いいたします。

なお、この調査は当面の間、任意でのご協力とさせていただきます。

*問合せ 黒川恵 (勤務先・電話03-3503-1915)

図書受入報告 (2003年9月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
大谷映芳	辺境へ	239pp/21cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈
外村直彦	「日本アルプス」を改名しよう	54pp/19cm	溪水社	2003	著者寄贈
足助明彦(編)	異国人の見た幕末・明治 JAPAN (別冊歴史読本 No.655)	155pp/26cm	新人物往来社	2003	出版社寄贈
立教大学山岳部(編)	クーンピマラヤ合宿:立教大学山岳部創部80周年事業	22pp/30cm	立教大学山岳部	2003	発行者寄贈
山本正基	かながわのハイキングコース ベスト50 (かもめ文庫 No.62)	243pp/15cm	神奈川新聞社	2003	著者寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜 2003:全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	191p/22cm	全日本山岳写真協会	2003	清水正己氏寄贈
湯原公浩	別冊太陽 日本の探検家たち:未知を目指した人々の探検史	151pp/29cm	平凡社	2003	出版社寄贈
西川浩	日本観と自然環境:風土ロジャーへの道	224pp/22cm	晩印書館	2002	著者寄贈
辻村太郎先生を偲ぶ会(編)	辻村太郎先生を偲ぶ	40pp/21cm	辻村太郎先生を偲ぶ会	1984	西川浩氏寄贈
Cameron M. Burns	Kilimanjaro & Mount Kenya: A Climbing & Trecking Guide	173pp/22cm	Cordee	1998	Mr. K.Dougherty 寄贈

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆奥多摩の森・自然観察会

自然保護委員会

森林インストラクターで林業家でもある原島幹典氏の案内で奥多摩の自然を満喫し、手入れの行き届いた素晴らしい森を歩きます。

日時 12月20日(土)

集合 9時15分青梅線奥多摩駅集合

合(ホリデイ快速おくだま1号新宿発7時43分が便利)

解散 奥多摩駅16時頃

費用 無料(集合場所までの交通費は各自負担)

申込 住所、氏名、電話を明記のうえハガキかメールで川越尚子宛(〒185-0001 1 国分寺市本多3-7-31 kawagoejac@mti.biglobe.ne.jp)

◆スキー懇親会のお知らせ

事業委員会

恒例のスキー懇親会開催します。

期日 平成16年2月6日(8日)

費用 3万円程度を予定

場所 志賀高原(宿泊場所未定)

集合 現地集合・解散

定員 40名

*詳細は次号に掲載します。

◆忘年山行 つくも会

期日 12月13日(土)~14日(日)

行程 13日 18時忘年会・大倉

14日 清掃登山・鍋割山

宿泊 どんぐり山荘(Tel 0463-8714706・小田急線

渋沢駅下車・大倉行きバス

終点・バス停前)

費用 1万円をお預りして精算

申込 11月30日までにハガキ、FAX、メールで吉澤平治宛(〒214-0034 川崎市多摩区三田3-1-2 川崎多摩区三田3-1-2 TEL 044-935-3001 TEL 044-935-5865 heihyo9621@ybb.ne.jp)

*開始時間にこだわらずご参加ください。その場合は要事前連絡。

ルーム日誌

9月

1日 総務委員会

2日 事業委員会 百周年事業式典委員会 アルパインスケッチクラブ

3日 会報編集委員会 山岳地理クラブ 新日本山岳誌編集

02同期会

4日 医療委員会 山の自然学研究会

5日 ビールパーティー

6日 名誉会員を囲む会

8日 資料委員会 アルパインスキークラブ

9日 常務理事会 高尾の森づくりの会 アルパインスケッチクラブ

10日 理事会 休山会 つくも会

11日 97同期会

16日 百年史委員会 インターネット小委員会 00同期会

17日 総務委員会 山研運営委員会 三水会

18日 総務委員会 科学委員会

19日 百周年拡大実行委員会 フォトビデオクラブ

24日 図書委員会 総務委員会

25日 アルパインスキークラブ

26日 事業委員会 青年部 山遊会

29日 自然保護委員会

総務委員会 百周年記念フ

オーラム委員会

30日 総務委員会 九五会

9月来室者618名

■訂正

10月(701)号2ページ1段

28行、同3段2行の橋本明は橋本清の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

◆編集後記◆

●創立100周年の準備が組織作りから、具体的な行動概要へと固まってきました。今回は大きな登山計画はありませんが、会員の全員参加を目標に「北海道から九州までの中央分水嶺踏破計画」も各支部の協力を得ながら進んでいます。募金活動もスタートしています。ご協力よろしく願います。(今村 千秋)

日本山岳会会報 山 702号

2003年(平成15年)11月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 今村千秋
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社